



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	雲南の「近代」を考え直す：世紀転換期における空間、メディアと知の交錯〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	董, 子昂
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第16323号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95255
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	DONG_Ziang_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：董 子昂

審査委員	主査	特任教授	鈴木	純一
	副査	教授	藤野	陽平
	副査	教授	金山	準

学位論文題名

雲南の「近代」を考え直す

ー世紀転換期における空間、メディアと知の交錯ー

本論文の目的は、清末中国、明治日本、そしてフランス植民地帝国が交錯する19世紀末から20世紀初頭にかけての中国雲南地方における「近代」の到来とその意味について考察することである。具体的に分析される対象は雲南を中心とする雑誌メディアの流通や近代思想の受容と社会組織の再編である。

本論文の根本的な視座は、伝統的中国の中では北京に対する「周縁」の地位にあった雲南が、もっとも「先進的」な西洋国家とのフロンティアとなったことで伝統的な中心ー周縁が相対化される中、雲南の知識人にとってこの二重の中心ー周縁関係に対する思考と反省を可能にしたのが明治日本との関係であった、というものである。このようにグローバルとローカル、中心と周縁が複雑に交差するなかから立ち現れる雲南の近代意識が本論文の主題となる。より具体的には当時の雲南知識人、とくに日本に留学した知識人と彼らの雑誌『雲南』が考察の中心に置かれる。本論文では、同誌に見られる雲南知識人の論説内容にくわえ、同誌上でなされた翻訳を通じたトランスナショナルな知の越境、そして雲南出身の知識人が日本で出版した中国語誌である同誌の流通経路といったメディア史的分析とを織り交ぜつつ、『雲南』を多角的に分析している。

本論文は序章・終章を含む全八章から構成される。序章では雲南の近代を論じるに当たっての本論文の視座が示され、第一章では「二重の周縁」として雲南が位置づけられる。第二章では雑誌『雲南』の発行・流通に関するメディア史的な検討がなされ、第三章では『雲南』に携わった知識人の一人である呂志伊の生涯と思想について、明治日本を経由した西洋思想の継受という観点から分析される。第四章では歴史の語りから雲南のアイデンティティの形成について、第五章では法と自治の問題について、第六章ではメディアとミリタリズムの関連が検討

される。終章は以上の成果を踏まえたうえで、あらためて本研究にとっての雲南と近代についての視座が示される。

本論文に関する審査は2025年1月17日16時30分から18時にかけて、院105室にて行われた。まず著者より論文の概要について30分程度で説明されたのち、審査委員による質疑と筆者からの応答がなされた。

主な質問としては、まず雲南が一枚岩に描かれすぎているのではないか、多民族地域である雲南内部の多様性や葛藤（さらには時間的な変容）をどう考えればよいのかという問いがあり、それに対して筆者はその点についての限界を認めたうえで、今後の課題として雲南の回族や台湾に移住した雲南人のアイデンティティ意識への考察を進めたいと応答がなされた。また「近代」という概念を用いることの意味についても質問がなされた。著者からは、法の支配や国民国家・ミリタリズムなど、当時の雲南が経験した諸々の理念や思想を一括して論じるための概念として用いた、と応答された。

ほかにも、「近代」の契機として著者が挙げる同時性・普遍性・自律性のくわしい内容、また「中心」と「周縁」、「ネーション」と「パブリック」といった著者が用いる鍵概念の内実、そして呂志伊による有賀長雄の翻訳（翻案）など文献解釈の個別の点をめぐる質問がなされ、それぞれに対して著者からは丁寧で納得のいく答えがなされた。

著者との質疑応答の後、審査委員間で慎重に審議を行った。審査委員からは、上述した雲南内部の多様性といった問題や、扱われた文献をめぐる個別の解釈において改善の余地がある点は認められるものの、全体としては次のように複数の次元で高い評価に値するものという評価がなされた。すなわち、これまで十分に扱われてこなかった資料を積極的に分析対象とする実証性、歴史を記述することへの自覚的な反省にもとづいた方法意識、中国語・日本語・英語のみならずフランス語の一次文献も用いる多言語性、そして歴史学（メディア史）と社会思想史という複眼的な分析手法である。

以上より、本論文が本学院博士（国際広報メディア）の学位を授与されるに値する水準を優に上回っていると審査委員は一致して判断した。